

今週の為替相場見通し(2019年10月15日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		106.55 ~ 108.63	108.45	107.00 ~ 109.30
ユーロ	(ドル)		1.0941 ~ 1.1062	1.1038	1.0850 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		117.07 ~ 120.00	119.71	118.50 ~ 121.00
英ポンド	(ドル)		1.2196 ~ 1.2708	1.2650	1.2400 ~ 1.2650
(1英ポンド=)	(円)	*	130.43 ~ 137.90	137.09	134.00 ~ 137.00
豪ドル	(ドル)		0.6710 ~ 0.6810	0.6793	0.6720 ~ 0.6850
(1豪ドル=)	(円)	*	71.84 ~ 73.96	73.56	72.20 ~ 74.60

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 岡本 明生

(1)今週の予想レンジ: 107.00 ~ 109.30 円

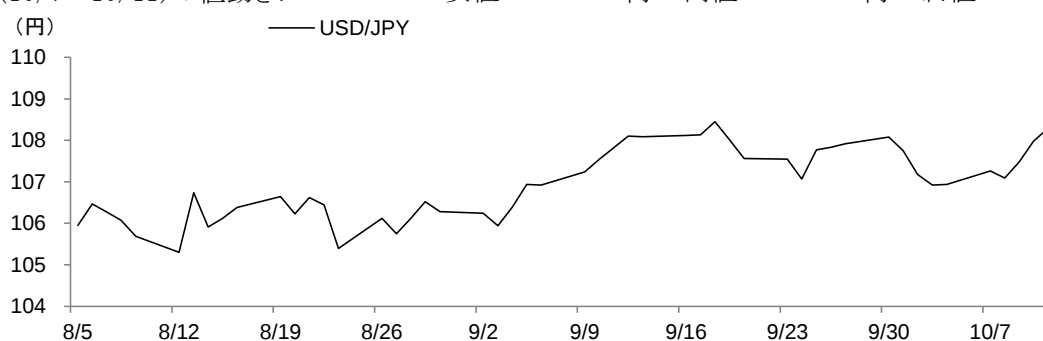
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に高値をつける展開。週初7日に106円台後半でオープンしたドル/円は、NYダウ平均が一時プラスに転じたことで107円を上抜け、中国が貿易交渉に対して協調的な姿勢であるとの報道に、一時107円台半ばまで上昇した。翌8日は米国が前日に中国企業8社をブラックリストに掲載すると発表したことに対し、中国側から報復を示唆するコメントが発表されると、リスクオフの円買いが進み、106円台後半まで下落した。その後、米金利低下幅の縮小などで反発したが、上値は重く、107円台前半の推移が続いた。9日は、米中通商を巡り、中国は米国と部分的な貿易合意に前向きな姿勢であり、米国産大豆の追加購入を提案したなどの報道にドル/円は上昇し、米金利も上昇する中、107円台半ばを推移した。10日は米中次官級貿易交渉の進展が無く、一時107円付近まで下落したが、米政府がファーウェイの製品供給を一部米企業に認めるとの報道を機に107円後半まで急伸した。その後、米9月CPIが予想を下回ったことで反落するも、米金利が上げ幅を拡大するとドル/円は再度上昇し、トランプ米大統領が中国との交渉は非常にうまくいったと発言すると108.02円をつける場面もあった。11日は前日の地合いを引き継いで108円近辺でもみ合い推移となったが、海外時間に入りトランプ米大統領が中国との貿易交渉で良いことが起きているとコメントしたことを好感して、ドル円は8月1日以来となる週高値108.63まで上昇。引け間際に米中貿易交渉はフェーズ1の合意に達したと報じられたものの、米3連休を前に上値重く108.45レベルで越週した。

今週のドル/円は、節目109円ちょうどを前に上値の重い展開を予想する。両国ともファンダメンタルズ・政治的な不安を抱える中、株価が堅調なうちに米中部分合意を決断したのは賢明な判断だろう。しかし、中国側が署名前に追加交渉を要求しており不安は残るものの、次のテーマは主要各国中銀の追加緩和で、月末にかけて期待感の高まりからゴールドロックス相場の再来となるか。しかし、17-18日(木・金)にEUサミットで英EU離脱合意を巡る最終協議がある他、18日には米国の対EU報復関税が発動される予定となっており、短期的に回復したリスクセンチメントが再び悪化する可能性は高いと見料。107円台前半まで下落するシナリオも想定しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: 安値 106.55 円 高値 108.63 円 終値 108.45 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 大谷 未央

(1) 今週の予想レンジ: 1.0850 ~ 1.1100 118.50 ~ 121.00 円

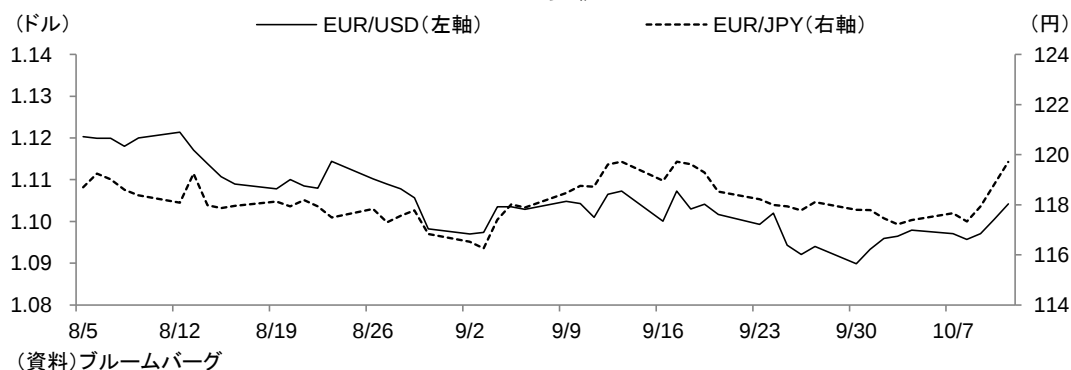
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に高値を付ける展開。週初7日に1.09台後半でオープンしたユーロ/ドルは、欧州経済の景気減速懸念が燃える中、欧州株の堅調推移を背景に一時1.10台をつけるが、その後は米中通商協議に関する前向きなヘッドラインを受けて1.09台後半に下落。8日はジョンソン英首相がメルケル独首相との会談で「ブレグジット合意は本質的に不可能だ」と述べ、合意なき離脱懸念が高まると、ユーロボンドの上昇に連れ高となり1.10付近まで上昇したが、その後の見切り売りで週安値である1.0941まで反落した。9日は「EUがブレグジット交渉で大幅に譲歩する用意がある」との一部報道を受けて急伸したポンドドルに連れ高となり、1.10付近まで上昇。しかし、先週上値を抑えられていた1.1000付近では上値が重くなり、小幅反落後1.09台後半で推移した。10日は短期筋のユーロ買いが持ち込まれているとの話もあり、1.1000レベルを上抜け上昇したが、その後は米金利の上昇を背景としたドル買いが進み反落した。11日はポンドドルに連れ高となり一時1.1062と週高値を付けるも、その後は米金利の上昇に伴うドル買いにより反落し、1.10台前半で越週している。対円では、週初7日に117.27円でオープンしたユーロ/円は、米中通商協議に関する前向きなヘッドラインを受けて117.90円台まで上昇。8日は欧州株や米国株が下落する中、リスク回避姿勢が強まり、週安値である117.14円をつけた。9日は米中通商協議の進展期待からリスク回避姿勢が和らぎ118円台前半まで上昇。10日は米中閣僚級会議が開かれる中、交渉が進展するとの期待から円が売られ、118円台後半まで上昇。11日は日米欧株価の上昇を背景にリスクオンの動きが強まると一時週高値である120.00円を付け、119円台後半で越週している。

今週のユーロ/ドルは上値重い推移を予想する。先週末に開催された米中閣僚級会議では部分的合意に留まったが、決裂という最悪の事態は回避され、15日(月)に予定されている関税の引き上げは見送られた。これにより今週はドル買いが進むと考えられ、ユーロ/ドルの上値は抑えられよう。また、今週は17日(木)、18日(金)にEU首脳会議を予定しており、10月末に期限を迎える英国のEU離脱問題について議論される。先週ジョンソン英首相と北アイルランドのバラッカー首相が会談を行い、英国のEU離脱に関して、「合意可能な道筋があることで一致した」と伝わっており、楽観的な向きが強まっているものの、EU首脳会議で英政府が離脱協定に合意できない場合、19日(土)までに英国は離脱延期を要請することが義務付けられている。ジョンソン英首相は離脱延期しないと明言していることから、市場に混乱が生じる懸念がある。また、18日(金)には米国による対欧州連合報復関税の発動予定日となっていることもあり、今週のユーロは上値重く推移すると予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.0941 高値 1.1062 終値 1.1038
(対円) 安値 117.07 高値 120.00 終値 119.71



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2650 134.00 ~ 137.00 円

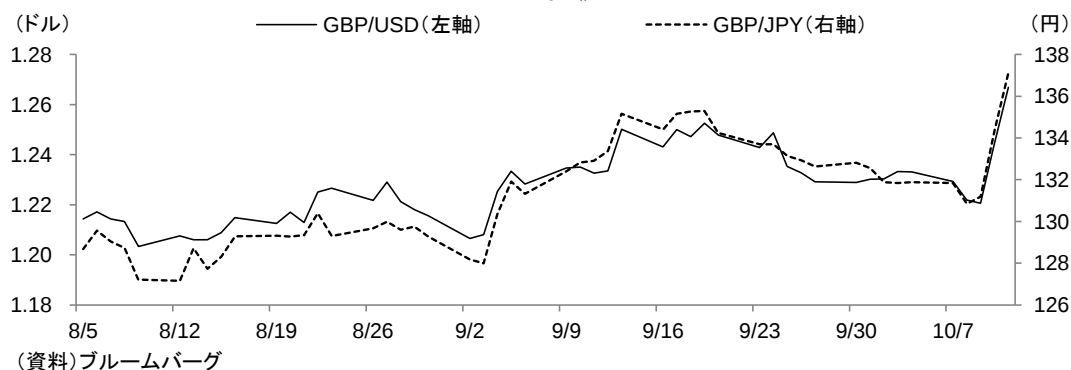
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、軟調気味の膠着先行から、EU離脱交渉を巡る楽観の台頭を追い風に大幅に上昇。週明け7日、ポンドは対ドルで1.23台前半、対円で131円台半ば、対ユーロで0.89台前半の水準で取引を開始。特段の材料も見当たらない中、じわじわと下押し、対ドルで1.2196(8日)、対円で130.43(8日)、対ユーロで0.90185(10日)とそれぞれ週の安値をつけた。ポンドが急上昇に転じたのは10日。発表された英8月鉱工業/製造業生産は市場予想を明確に下振れたものの、ポンドの反応は限定的で、同日行われたジョンソン英首相とアイルランドのバラッカー首相の会談後、両首脳が英のEU離脱合意に向けた「道筋」を見出したと報じられたのを好感してポンドは急上昇を見せた。更に11日、EU側のバルニエ首席交渉官が、バークレイ英EU離脱担当相との会談後、「法的文書(離脱合意)の草案作成作業に着手するために十分な進展があった」などと述べたことで、合意に向けた期待感が一気に高まり、ポンドは続騰した。加えて、前後して米連銀による追加利下げ観測が強まったことでドル全般が水準を切り下げていることもポンドには追い風になったものと考えられたが、並行して、米中通商交渉に関する楽観の広がりがリスク許容の円安を誘ったことで、円全面安(対ドルを含め)も進んだ。値動きを振り返ると、一連の外部要因を受けたポンド/円の急騰が、ポンドの上昇に勢いを加えたようにも見えた。

今週の英ポンド相場は、上値の重い膠着を中心に予想。今週は、14日(月)に英女王の演説(英議会開会)、17日(木)~18日(金)にEU首脳会談、19日(土)に英下院の特別審議など注目の政治日程が続く。英離脱交渉の成否は、EUとの離脱合意の可否、仮に合意が成立した場合は英下院における同合意承認の可否などを見極めるまで判断がつかず、少なくとも週末までは明確にならない可能性が高い。先週11日に掛けて俄かに盛り上がった合意にむけての楽観だが、今週は、完全には否定されないまま、曖昧模糊とした失望が続く可能性が高いものと見込む。先週末を越えても英新提案の具体的な内容ははっきりしないままだし、EU側からは「(少なくとも)現在までの提案では不十分」と否定的な声も既に聞こえてきている。そもそも、北アイルランドをEUの関税同盟に残しながらも、同時に英全土と同じ独自の関税を適用できるなどといった解決策は、常識に照らし合わせても現実には存在するとは考え難い。逆に言えば、先週末に掛けて観察されたポンド急騰は、おそらくはポンド/円を中心に、ポンドの売り持ち高がそれだけ大量に積み上がっていた可能性を物語ろうが、買い戻すポンドが引き続き大量に残っている可能性は高くないのではないかと。他に、英からは、15日(火)に英6~8月平均賃金、16日(水)に英9月CPI、17日(木)に英9月小売売上高などの主要英経済指標の発表が相次ぐが、市場の関心は英のEU離脱交渉に集まっており、経済指標に大きな反応を示す可能性は見込み難い。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.2196 高値 1.2708 終値 1.2650
(対円) 安値 130.43 高値 137.90 終値 137.09



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 0.6720 ~ 0.6850 72.20 ~ 74.60 円

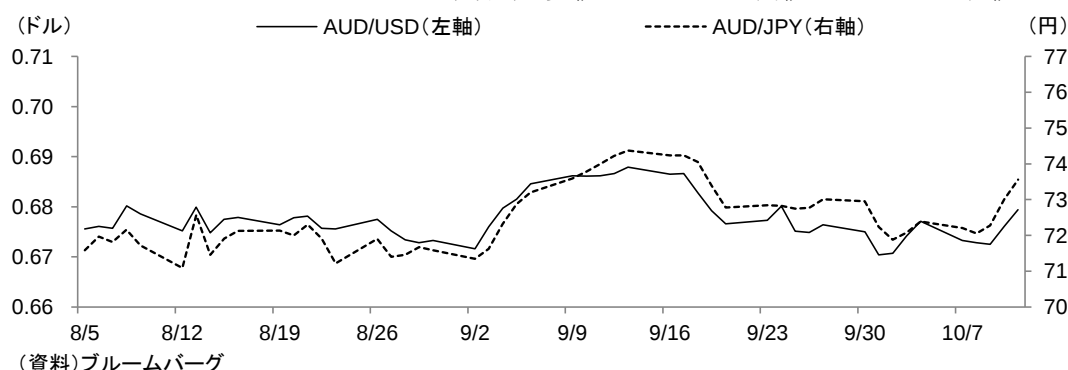
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は米中貿易協議合意への期待感から上昇した。週明け7日は豪州市場休場の中、米中貿易協議に対する懸念から人民元安に連れる形で0.676台まで下落しオープン。しかし海外時間にはクドロー米NEC委員長やトランプ米大統領から合意の可能性についての発言があり買い戻された。8日、9月豪企業景況感の雇用指数が市場予想を上回ったこと等を受けて0.675台まで上昇したが、その後米国が中国の企業8社を新たにブラックリスト入りしたことに対し中国側が報復措置を示唆したことや、米国が中国当局者のビザ発給を制限する等の報道を受けて下落した。9日、米中貿易協議に関し中国側が一部合意にオープンと報道を受けて底堅い展開となるも、米金利上昇を受けたドル買い優勢となり下落。10日、早朝に中国側が米中貿易協議に進展が期待できないとし予定より1日早く米国より帰国するとの報道を受けて週安値となる対ドルで0.6710、対円で71.84円まで下落。しかし、その後は部分合意として通貨協定を打ち出すことを検討、米国がファーウェイに対し一部の米製品供給を許可する方針との報道を受け豪ドルは0.677台まで急上昇する荒い値動きとなった。11日、米中貿易協議に関し部分合意流されるとの観測から豪ドルは堅調推移となり週高値となる対ドルで0.6810、対円で73.96円まで上昇。そのまま高値圏で引けた。

今週の豪ドル相場は米中問題への懸念後退を背景に上値を迫る展開となりそうだが、指標次第では上値を重くする展開を予想する。米中貿易協議については知的財産、金融サービス、農産物の購入を含む第一段階の合意に達した。15日より予定される追加関税の引き上げについては延期または中止となるか不明ではあるものの、いったん米中貿易問題への懸念が和らいだことでリスクオンムードとなり豪ドルは底堅いであろう。ただ、今週は17日に豪9月雇用統計の発表がある。8月の雇用統計では失業率が上昇し10月の豪州準備銀行(RBA)での利下げへ繋がったことから、失業率への注目が集まる。市場予想では失業率は前月比横ばい、雇用者数は前月から伸びが鈍化することが予想されているが、市場予想を下回るようであれば豪ドルの重しとなりそう。他には18日には中国の7~9月期GDPや9月鉱工業生産等の発表があり、GDPが6%を下回るようだとこちらも豪ドル安に繋がりそう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.6710 高値 0.6810 終値 0.6793
(対円) 安値 71.84 高値 73.96 終値 73.56



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。